

【論文】

岩倉使節団の米欧博物館見学  
— イギリスを中心に — (下)

The Japan Embassy 1871-1873 and Museums in Western Countries  
— With a Case Study of Their Museum Visits in Britain —

岩本陽児<sup>\*</sup>  
Yohji IWAMOTO

1. はじめに
2. 岩倉使節団について
3. 岩倉使節団の博物館視察
4. 岩倉使節団とイギリス  
(以上、前号)
5. 岩倉使節団のイギリス博物館見学
6. おわりに

5. 岩倉使節団のイギリス博物館見学

前号では、明治初年の日本政府による大型遣米欧使節団、通称岩倉使節団について、近年の研究史をレビューし、その公式報告書の全巻を通じて博物館見学に関する記述を確かめ、歴訪12カ国の中でも使節団がもっとも関心を寄せていたとされるイギリスについて、1872年当時における博物館の発達のもようを参照した。

本節では、岩倉使節団がイギリス滞在中に行った博物館視察について見ていきたい。

5-1南「ケンシントン」ノ博覧会

(South Kensington Museum) Prince Albert Road, ロンドン, ②64-69

8月19日(旧暦7月16日)月曜、晴れ

公式日程の初日となった週明けのこの日、まずグラッドストーン(Gladstone)自由党政府の外務大臣グランヴィル伯爵(Earl of Granville)を外務

省に表敬訪問した使節団一行は、午後7時からは外相夫妻が主催する晩餐会でもてなされた。そのあと、南ケンジントンの国際博覧会場(International Exhibition, South Kensington)内にある、王立園芸協会の大温室(The Conservatory, RHS)で開かれたイブニング・プロムナードに案内され、使節を歓迎するためにライトアップされていた博覧会場内を一覧している。使節団にとっては、ここがイギリス最初の見学先となった。なお、この訪問についてはThe Times 1872. 8. 14. に予告記事がある。当時の新聞ではいずれもInternational Exhibitionとなっており、サウスケンジントン博物館という名称は使われていない。

この会場はケンジントン・ゴア(Kensington Gore)にあり、プリンス・アルバート・ロード(Prince Albert Road)の端に近い北西の入り口から入場した彼らは、スコッツ軍楽隊(The Scots Fusilier Military Band)の演奏を聞きながら待ち受けたイギリス側の人々に迎えられ、挨拶を手みじかに交わしたあと、館内の見学にうつった。

英国絵画の画廊(The English Picture Gallery)を通ってから突き当たりで階段を下り、北に向かって歩きながら機械部門(The Machinery Department)を見学している。最後の絵画展示室を見終えたところで、彼らはいったんバルコニーに出て、それから館内に戻ったが、花柄が刺繍してある絹の

\* レディング大学大学院、イギリス連合王国  
(University of Reading, England, UK)

平成10年7月21日受理

和服が展示してあったのに、ちらりと見ただけで前を素通りし、反応を楽しみに見守っていたイギリス側の人々をがっかりさせた。日本使節は洋服を着用していた。一行は三々五々コンサーバトリーまでやってくるが東側の席で小休止したが、ほどなく席を立てて東側にある海外絵画のギャラリー (Foreign Picture Galleries) を手みじかに観覧した。その後スコット将軍 (General Scott) ら、展示会場の役員に挨拶して退出した。というのが、この晩の見学である。夜遅かったこともあって、簡単な見学だったようである。(The Manchester Guardian 1872. 8. 21. この他The Times 1872. 8. 20. にも簡単な報道がある)。

サウスケンジントン博物館は、世界の美術品や産業機械類を展示していただけでなく、出展者によるデモンストレーションも行われているという点では産業見本市でもあった。また、書籍3万3千冊、図面1万点、彫刻見本2万点、写真3万5千点も収集されていた(『実記』②64-66頁)。現在は数館に分化しているが、当時は単一の総合館である。

現在のビクトリア・アルバート(V&A)博物館は1852年にモールバラハウス (Marlborough House) で、1851年の第1回万博の展示品および美術学校 (The Schools of Design) のために購入した標本、塑像のコレクションをもとにした装飾芸術博物館 (Museum of Ornamental Art) として出発し、1857年に現在地に移っている。同年シープシャンクス・コレクション (The Sheepshanks Collection) の寄贈を受けたことは『実記』にも「美術ニカナル画図ノ類ハ上層ノ楼上ニアリ『シープサンク』氏ノ寄納物ハ其根基ニテ、価5万3千磅ニ越ユ」と言及されている。旧館部分は1860年から84年にかけて増築され、使節団の来訪時はまだその完成前であった。『実記』は「初房ヲ芸術用細工物ノ区トス、此ニ印度ノ産物ヲ示ス」とインドの美術品について述べているが、これは新聞の紹介する初回の見学順路と違っており、2度目の訪問 (後記) の際の見学内容であったものか。新館部分は1899年から10年がかりの工事のすえ1909年に完成したものの。1899年にビクトリア女王の命によりV&Aと改称された。(MA 1931, 231)

現在の科学博物館 (The Science Museum) が、

サウスケンジントン博物館の科学・技術部門として発足したのは1853年のことで、1856年に正式開館している。1883年にはパテント博物館 (The Patent Museum) の収蔵品を移管。1909年になって美術部門がV&Aに移ったのにもなって分離した (MA 1931, 224-225)。また、現在の国立肖像画館 (National Portrait Gallery) のコレクションは1869年以来、85年にベスナル・グリーン (Bethnal Green) に転出するまでサウス・ケンジントン博物館に収蔵、展示されていた (MA 1931, 218)。なお、自然史博物館 (The Natural History Museum) は岩倉使節団の来訪当時はまだ大英博物館 (The British Museum) と分離していなかった。現在の建物は使節団来訪の翌年の1873年から80年にかけて建築されたものである (MA 1931, 192)。

『実記』ではここを博物館とは呼ばず「博覧館」と「常博覧会」という語を充てている。これについて松宮1995は、博覧会がなぜ日本に根づかなかったのかを論じるなかで「幕末、明治初期の開明的官僚知識人たちが、久米もそのひとりであるが、博覧会を基本的には『博物館』設立の予備段階と考えていたこと、つまり、博覧会の制度は『常設の博覧会』としての博物館の設立において完成するものと考えた故に、博覧会が最終的には『ミュージアム』の問題に吸収され、博覧会の固有の問題性と思想性を分離・発展させることができなかった。つまり、彼らは『エクスポジション』と『ミュージアム』を区別せず、同一範疇内で理解しようとした」(234)として、それは「博物館事務局」の御用掛から事務副総裁となった佐野常民が「あえて図書館、美術館をミュージアムから排除し、『サウスケンジントン博物館』を真の意味のミュージアムの『権興』(始まり)と」考えたためであるとしている(238)。しかし、久米について述べるなら、ウォーリックの市長宅のコレクション (後述) に博物館という言葉を充てるなどの例もあり、具体例に即した詳細な検討が必要であろう。なお『実記』のこの項には、イギリスの産業デザインの成功のエピソードを紹介しながら、日本人の舶来品信仰を批判する編者久米のコメントが付けられている。

## 5-2「博物館、水族室」

Pavilion Buildings / Marina Parade  
 Brighton ②70-71

(8月20日、火曜日、晴れ)

その翌日の火曜日、使節団一行は、接待掛の日本公使ハリー・パークス卿 (Sir Harry Parkes) らに案内されてロンドンのビクトリア駅 (Victoria Rail Station) から列車で Brighton (Brighton) に日帰り旅行に出かけている。すでに森川1980 (1987, 144に準拠) は、英国側の受入態勢の不備を指摘しているが、この日の視察が現地に依頼されたのはその朝であったという新聞報道が、それを裏付けている。(The Brighton Gazette 1872, 8, 22.)

駅に到着した日本使節は、コーディ・バロウズ (Cordy Burrows) 市長に案内されて、おりから開催中だったブリティッシュ・アソシエーション (The British Association) の第42回年次大会のレセプションルームを訪ね、協会の役員を紹介されたのち「駅の傍らの博物館」すなわち、ロイヤルパビリオン (The Royal Pavilion) に案内された。そこでは学会参加者むけの特設美術展が開催されていた。現在この建物は市が管理しており、イギリスの美術館・博物館局 (The MGC) に登録された博物館となっている。

この時の特設美術展では国内外の美術工芸品や歴史的な興味のある品々が出展されており、展示品の中には次のようなものがあった。地元の C. J. ローセル (Rowcell) 氏の高浮き彫りの金属工芸品、ファンネル (Funnel) 氏の超小型時計。チャールズ一世 (Charles I) が処刑された時に着用していた襟と帽子は直系の子孫ジョージ・サムズ (George Somes) 氏の出展。同夫人からはウィンブルドン・コモン (Wimbledon Common) の工房で自作したニネベ (Nineveh, 古代エジプト) の大理石の複製も数点出展されていた。バーネット夫人 (Mrs. Burnett) 出展のウェッジウッド (Wedgwood) 社の焼き物数点、アーサー・ウッズ (Arthur Woods) 氏からはインディアンの像を数点納めたケースが出展された。エドワード・ブライト (Edward Bright) 氏は宝石標本やホルバイン (Holbein) のロケット、めのうのカメオ。トマス・ディビッドソン (Thomas Davidson, Esq., F. R. S.) 氏他からは王立協会

(The Royal Society) の金メダルその他。オーメロッド (Ormerod) 氏出展の洗礼式のプレゼントの銀のスプーン。リビングストーン (Livingstone) のスケッチ等々。これらは、学会の終了後、一般市民にも公開された。(The Brighton Guardian 1872, 8, 21.)

Brighton の博物館は、1850年に収集を開始しており、ジョージ四世 (George IV) が摂政宮だった頃、1815年から1822年にかけて離宮として建築家ジョン・ナッシュ (John Nash) につくらせたロイヤル・パビリオン (The Royal Pavilion) の建物が、1856年くらい仮設博物館 (The Temporary Museum) となっていた。1860年に Brighton 王立文芸科学協会 (Royal Literary and Scientific Institution in Brighton) のコレクションが寄贈されたことにもなると、博物館はパビリオンに程近いチャーチ・ストリート (Church Street) につくられた新館 (現存) に移転し、それ以降、パビリオンの方は補助館として使用されていた。(MA 1931, 52)。この日、日本使節がチャーチ・ストリートの博物館も見学したという記録はない。

彼らは午後1時半に『実記』にいう「学校」つまり地理部会の会場だったミドルストリート (Middle Street) のコンサートホール (The Concert Hall 現存しない) でモスマン (Mossman) による「江戸」の都市論についての研究報告を聞き、2時から市長夫妻の催した昼食会に列席した後、日本使節団は水族館 (The Brighton Aquarium) に案内された<sup>(註9)</sup>

『実記』にはこの水族室は「近年ニ勅議シテ設ケタルモノナリト云」とあるが、この開館式は8月10日の土曜日。つまり彼らの訪問は開館後わずか11日目であった。(The Brighton Guardian 1872, 8, 14.)。最初の1週間だけで4千人の入館者があった。この時、日本使節は、長さが215メートル、幅が30メートルという水族館の建物のほとんど隅から隅まで案内された。一行は再訪の意向を伝えてそこを後にして、市長の馬車で Brighton の海辺をドライブしてもらったのち、5時の汽車でロンドンに帰った。その晩にはサウスケンジントンの国際博覧会場に程近いロイヤル・アルバート・ホール (The Royal Albert Hall, 現存) で、ピーブルズ・コンサートを聴いている。(The Times 1872, 8, 21., The London and

China Express 1872, 8, 23.) この会場は1871年に完成していた (Wheatley 1891, vol. I 16)。

2日後の木曜日(22日)に、彼らは約束に違わず朝のうちからパークス公使らとともにこの水族館を再訪し、役員に館内をすみずみまで案内してもらっている<sup>(注10)</sup>。ただ『実記』にその記録がないところを見ると、久米は岩倉とともにロンドンに居残って、来見した駐英スペイン公使の対応などに当たっていたのであろう(田中1978, 389を参照)。「実記」では、2回にわたる見学を、初回の日付で記事にまとめたという可能性も考えられる。

この水族館は、海岸沿いに2年がかりの工事のすえ完成した私立館で、建物の北側、つまり陸側には、長さ48メートル、幅12メートル、高さ9メートルという温室(現存しない)が付属していて、シダなどの植栽があった。

水槽を並べた回廊は3つあって、海水・淡水の魚類各種を飼育していたほか、サケのふ化の展示や、イソギンチャクのコレクションまでもっていた。水槽のガラスは、平均的な大きさで1.85メートル×1メートル。厚さは2.5センチだった。海水は海からメインタンクに汲み上げられたのち、それぞれの水槽に送られていた。こうした水の循環に使われていた蒸気エンジンは、容量2,300トンのメインタンクを10時間で満タンにするほど強力なものだった。水槽に空気を吹き込むのにも動力が使用されていた。この当時、水族館では、水産資源に関する知識の教育・普及も意図されていた。おりから家畜の口蹄疫の流行で、牛肉・羊肉の価格が上がってきており、比較的安価な魚食を普及させることは国民経済への貢献につながると考えられていた(The Brighton Guardian 1872, 8, 14.)。日本人使節団にもこうした説明が行われていたものであろうか。

使節団の一行には、ここで飼われていた魚がどういふ種類のものか、ほとんど分らなかったという。日本に多いカメ(トータス)に似ているというので、ウミガメ(タートル)が殊のほか日本使節の関心をひいたとあるが、その記事には「ウミガメは彼らの水域には見られない」とも書いてあり、当時のイギリス人の認識がわかる。(The Brighton Guardian 1872, 8, 21., The Times 1872, 8, 22.)

ここで飼育されていた魚類のなかには次のような

ものがあつた。キュウリウオ数種、フロウンダー(カレイ)、舌平目、ブリーム(タイの類)、ラッス(中型のべら)、ウィッティング(タラを小ぶりにした姿の海産魚)数種、ヨウジウオ、ネコザメ、アカウミガメ、タイマイ、ロブスター、かに数種、モトアナゴ(巨大なハモの類)、ほうぼう、すずき、子えび、あんこう等々。9月には南中国からベタ(闘魚)も来たという(The Brighton Gazette 1872, 8, 29, 他)。イギリス近海に産する食用種が多い。

この水族館は現在も海洋生物センター(The Sea Life Centre)として公開されており、60余種の水棲生物を飼育、公開している。入り口に近い一角にはビクトリア時代の展示室が復元されており、当時のタイマイの剥製も陳列されている(1998年7月現在)。なお、その後11月30日に、木戸孝允は書記官ら5名の日本人とともにブライトンに一泊旅行に來たおり、翌12月1日にロイヤル・パビリオンとこの水族館を再度、見学している。

### 5-3戦艦ビクトリー号

#### ポーツマス港 ②74

8月29日(旧暦7月26日)木曜、晴れ

岩倉使節団はこの週の月曜午後にロンドンを発つて金曜の夜にロンドンに戻るまで、ドーセット州ブランドフォードでの陸軍演習や軍港ポーツマスの視察など、軍関係の施設を見学した。この日程中、8月29日には、昼前に「火艇」に乗船してスピットヘッドに停泊中の英仏海峡艦隊(チャンネル・フリート)を訪ねるまでの時間に戦艦「ヴィクトーリア」号(H. M. S. Victory)を見学している。ただし、この日の彼らの行動を伝える新聞記事(The Portsmouth Times and Naval Gazette 1872, 8, 31.)はこれについての言及を欠いている。

この艦は1805年のトラファルガー(Trafalgar)の海戦の時の英艦隊の旗艦で、日本使節は、名將ネルソンの最期の物語を聞かされ、直筆の書状などを見せられて、大いに感動したことが『実記』から分かる。その当時、この艦は港内に係留されていたが、1922年に乾ドック内に固定された(Stevens 1986, 27)。ビクトリー号およびネルソンのコレクションはその後、1911年に開館した王立海軍博物館(Royal Naval Museum)通称ビクトリー号博物館でひ

きつづき公開されている。

#### 5-4 倫敦禽獣園 (動物園)

Regents Park, ロンドン ②77-78

8月31日 (旧暦7月28日) 土曜日

前の晩遅くに軍都ポーツマスの視察旅行からロンドンに戻ってきた使節団は、この日、昼から「レーゼントパーク」(Regent's Park) の中にあるロンドン動物園に出かけている。だが、これも現地の新聞には記事を欠いており、使節団の動物園見学が、公式の日程ではなかったことを示唆している。

『実記』の記述は開園の経緯からはじまり、園内のすぐれた景色とそこに飼育されている動物たちについて、対句や比喩といったレトリックを駆使して、漢文読み下し風の美文調で描写している。そこにはゾウ、ラクダ、カバ、クマ、キリン、ライオン、トラ、ヒョウといった哺乳動物や、鳥類、爬虫類、それに昆虫にいたるまで各種飼われていたとあり、当時からすでに、現在とそれほど変わらなかった様子である。

ここは1828年4月に開園した動物学協会 (The Zoological Society) の施設で、飼育技術も優れていた。例えば『実記』が「池中ニ江豚 (ヒポタムス) 浪ヲ蹴リテ走り」と記したカバには、その後「11月5日の火曜日、朝7時ごろ」に出産したものがおり、「母子ともに健康」で、仔カバは時節柄「ガイフォークス (Guy Fawkes)」と名づけられ、一般公開された (The Times 紙上の広告による)。『実記』によれば、蒸気の熱を利用して熱帯の動物や鳥類、爬虫類を地下室で飼育しているようすが、日本使節にはことに興味深かったようである。

岩倉使節団の動物園見学に関する先行研究として中野1993がある。これにはライデン大学付属博物館 (Het Rijks Museum van Oudheden) の「南亜米利加洲ニ生スル羽族」すなわちペンギンをカモノハシと断じた誤りもあるが、中国文学者の立場から同時代の中国人による西洋の動物園の観察記録とこのロンドン動物園報告も含めた『実記』の文章とを比較しており、興味深い。中野は、前者が「美文調を排しそれぞれの動物の外貌や生態や産地などを能うかぎり正確に書き留めようとしているのがうかがわれる」のに対し、『実記』は「対句をちりばめた

美文調にするための修辞上の努力が、記述を貧困にしている」と指摘して (232)、動物園というものに対して「結局は園遊の地という認識を越えることができなかったのではあるまいか」(233) と述べ、「岩倉使節団にとって欧米先進諸国から学ぶべきものは、政治・経済・技術などの先進的諸制度にとどまり、動物園ごときは所詮は有閑施設にすぎなかったようである」(237) と結論づけている。

なお、この当時の入園料は、大人が1シリング、子どもは半額の6ペンスだった。月曜日は入園料が特別割引で、大人半額になり、子どもと同額の6ペンスとなっていた。(The Timesの広告による)。

#### 5-5 「プリンス、アルベルト、ロード」ノ博覧会

Prince Albert Road, ロンドン ②90-91

1872年9月6日 (旧暦8月4日) 金曜、晴れ

岩倉使節団は、イギリスに到着後そうそうに案内されていた南ケンジントンの国際博覧会を、2週間あまり後に再訪している (The Times 1872. 9. 7.)。プリンス・アルバート・ロードは、現在はリージェント公園の北をめぐる道路の名称だが、別のものである。19世紀に刊行されたロンドンの街路の解説書<sup>(註11)</sup>に、管見のかぎりこの地名は現れていないところを見ると、それほど重要でない短い街路であったと思われる。

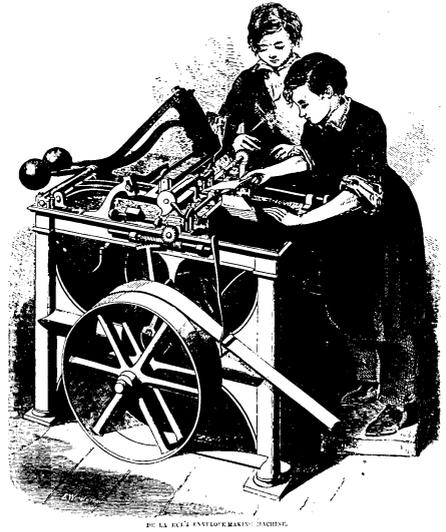
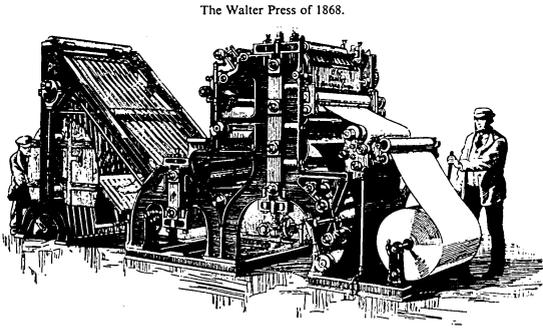
この日は、ビクトリア女王への謁見の打ち合わせなどを済ませたあと、午後から半日かけて見学した。広い館内を再度観覧したあと、今回は産業機械の見学に時間をかけている。

博覧会側の案内役は『実記』にいう「マジョールウィントン」すなわちド・ウィンテン少佐 (Major de Winten) とグローバー大尉 (Capt. Grover)。ベルギーのコーナーはベルギー人のコミッショナー、M. コール・バン・デア・メーレン (M. Corr van der Maeren) 氏が案内してくれた。丁寧な歓迎ぶりだったことが『実記』に記されている。

使節団の一行は、タイムズ紙 (The Times) を印刷するウォルター・プレス (Walter Press) 社の印刷機やエコー紙 (The Echo) を印刷するマリノーニ (Marinoni) 社の印刷機を見学し、それから、ディキンソン (Dickinson and Co.) 社の封筒製造機や、銅板印刷機、綿紡績機などを丹念に視

図版1 印刷機

図版2 封筒製造機

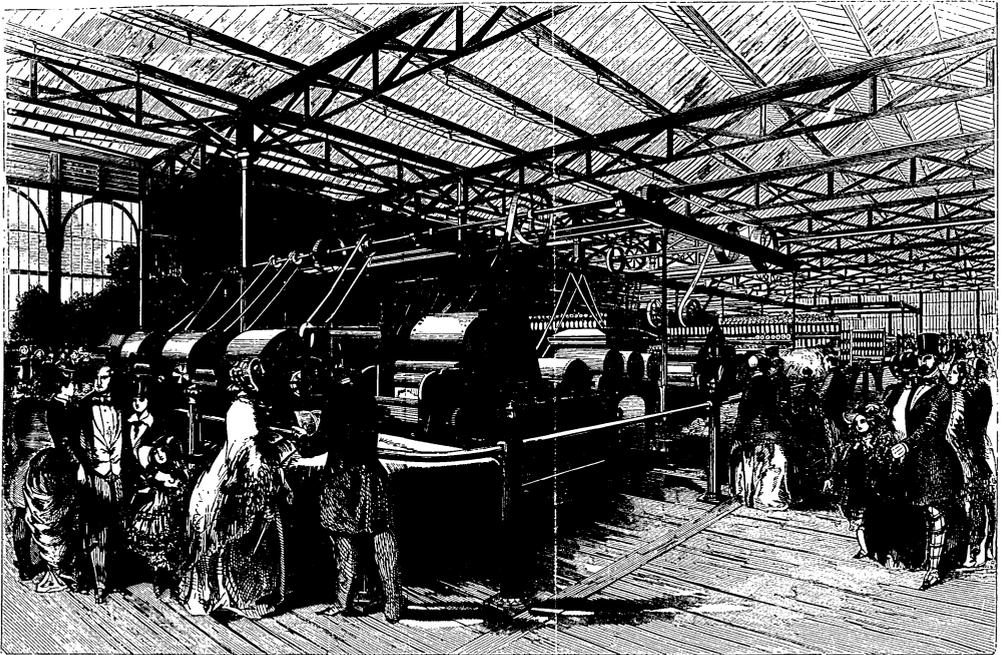


出典、The Times 200年史

出典：The Crystal Palace and its contents

図版3 綿紡績機

THE CRYSTAL PALACE AND ITS CONTENTS; AN ILLUSTRATED CYCLOPEDIA OF THE GREAT EXHIBITION OF 1851.



出典：The Crystal Palace and its contents

察した。かつて薩摩藩は慶応元（1865）年の11月にプラット（Plattか？）社の紡績機械を購入して、英人技士の指導の下に工場を運営していたから（原口1973、206）、副使の大久保利通ら、そうした経緯を知っている者にはことに興味深い見学であったと思われる。また、『実記』が明治11年に刊行された時に、挿画を印刷した銅板印刷機械がこの時に見学したものであったかどうか、関連が注目される。

L. メティン（L. Matin）氏が説明した紙漉き機械や印刷機、事務機器（ステイショナリー）に、日本使節一行は多大の関心を示した。また、9日付のタイムズ紙の記事には、日本使節が和紙のコレクションが展示されていたことに満足の意を表明したとある。それらは外務省をつうじて収集されたものとあるので、これは、この日も彼らの案内に当たっていたパークス公使の仕事の一環だったことになる。

会場では、警官が彼らのために整理にあたったことが『実記』に言及されているように、ここは年間入場者数が115万人と、当時のロンドンの人口の3分の1を越える抜群の集客力をほこる施設であった。なお現在のV&A博物館の入館者数は、各地の分館をあわせても年間に160～170万人である（The Guardian 1997, 11, 12.）。この日の入場者は2,953名で、内訳はシーズン・チケット（定期券）が216名、1シリングの当日券による入場が2,737名だったというから、この日一日の粗収入は約135ポンドということになる。これは、イギリスの歴史的な文脈からすれば、産業振興のための施設であると同時に、ポスト・インダストリー段階におけるレジャー大衆化の先駆けでもあったと理解できるだろう。

図版 イギリスの産業機器のデモンストレーション（1851年の第一回万博の展示品から）

1. 印刷機（絵入りロンドン・ニュースを印刷していたもの）
2. 封筒製造機（DE LA RUE社）
3. 綿紡績機（HIBBETT, PLATT, AND SONS社）

#### 5-6 ロタンダ火器博物館

Woolwich Common, ウーリッチ(ロンドン東郊) ②93-95

9月10日(旧暦8月8日)火曜

テムズ川の下流にある町「ウールウィッチ」(Woolwich)は、欧州最大の王立造兵廠等が置かれた軍事拠点である。『実記』には記載がないが、じつは、岩倉大使たちがポーツマス(Portsmouth)に向かった8月28日に、すでに使節団の別働隊がここを視察している(The London and China Express 1872. 8. 30.)。この2回目の見学は、イギリス側にとっては予期せざるものだったという(The Times 1872. 9. 12.)。

この日、日本使節一行はパークス公使とアレキサンダー将軍(Major General Alexander)の案内により、朝から「小火輪船」すなわちスチーマーに乗ってテムズ(Thames)川を下り、ウーリッチの棧橋で主計官のゴードン大尉(Capt. Gordon, C. B.)に迎えられた。

それから一行は、造兵廠の視察に先立って「武器司ノ武器倉」を見学しているが、これは1819年に開館したロタンダ火器博物館(Artillery Museum, Rotunda.)である。その歴史は1788年にまでさかのぼる。この建物は、ロタンダという名前からも分かるように、太い木の心柱で支えられた大型のテントで、1814年にセント・ジェームズ公園で開かれたナポレオン戦勝記念パーティに海外の賓客を迎えるために、バッキンガム宮殿(Buckingham Palace)や上記パビリオンの設計者ジョン・ナッシュ(John Nash)によって数基作られたうちの1基である。1819年に現在地に移築され、それ以来銃、砲を主体にして陸軍の火器を展示している。(MA 1931, 239)。現在では、歴史的建造物として2等級の文化財指定を受けている(1998年現在の同所のパンフレットから)。

敷地内には現在と同じく、各種の大砲が展示してあった。「露西亞及ヒ支那ニテ分捕セシ大砲」のうち、ロシアの大砲が激戦の跡をとどめているのに対し、支那砲は鋳型から出したばかりの新品同様に「以テ支那人ノ戦ニ弱キヲ知ルニ足ル」と『実記』は記しているが、現在の解説によれば、この砲は1860年に鹵獲されたものとある。その12年後に日本使節が見たときはなるほど新品だったのであろう。天保15年製の日本の青銅砲も展示されているが、こちらは『実記』には言及されていない。

館内に入ると、左手から時計回りに年代を追って大砲が展示してある。各国から鹵獲した砲に混じっ

てビクトリア女王がフランスでナポレオン3世 (Napoleon III) から贈られたという装飾的な大砲もあり、薩英戦争や上野の彰義隊攻めなど、幕末明治の日本史で非常に重要な役割を果たしたアームストロング砲 (12 PR. Armstrong B. L. Gun) も展示されている。これは、薬莖こそ使わないけれども、後装式で椎の実弾を使用し、砲身は火薬の高圧に耐えるように鋼をコイルにまいて強化しており、しかもライフルを切っただけで砲弾が長距離を直進するという、かすかすの点で画期的な新兵器であった。ところがこの新式砲は、旧式の先込め砲よりもかえって弾込めに時間がかかったことから、いったんイギリス陸軍に採用されたものの、その後、この砲の利点を取り入れて改良された先込め砲に取って代わられている。時代に逆行するかのような不思議な現象である。その横に展示されている同時代のドイツ (プロイセン Prussia) のクルップ (Krup) 砲は、レバー操作で砲底が簡単に開くようになっており、凝ったつくりのアームストロング砲よりもはるかにシンプルで優れていた。明治の新政府が、はじめ日本と同じ島国の立憲君主国イギリスを日本の国づくりのモデルに考えていたのに、その後プロイセンをお手本とするように変化したのは、その後この新興国を訪問した際に面会したビスマルク (Otto Bismarck) やモルトケ (Graf von Moltke) の所説に心酔したからと一般に理解されているが、それに加えて、こうした英独の製作品の違いを各所で実見したことも理由として考えられるのではないだろうか。

この他、幕末明治に日本に入ってきたスナイドル銃等も展示されているが、こういった軍用小銃は当時1丁が3ポンドで、狩猟用の銃よりもはるかに安かったことが『実記』にある。日本使節団がアメリカのウェストポイント (West Point) やアームストロングの工場で試射を見たガトリング機関銃も展示されている。

#### 5-7「タワー、オフ、ロンドン」の「武庫」

Tower Hill, ロンドン ②103-104

9月18日 (旧暦8月16日) 水曜日、くもり

一行はこの日の午後から、パークス公使、アレキサンダー将軍の案内により、ロンドン塔、電信寮、

郵便局総館を見学している。新聞記事には記載がない。

『実記』にはロンドン塔で王室の宝物を見学したあと「夫ヨリ引続キテ武庫アリ、古甲古戟ヲ夥多シク蓄へ、ミナ年紀ヲ付焼セリ」とある。この武器コレクションはヘンリー8世 (Henry VIII) によってグリニッチで開始されたもので、エリザベス1世 (Elizabeth I) の時代に現在地に移された。今世紀に入ってから短期間、大英博物館に移管されたのち、H. M. Office of Worksに移管され (MA 1931, 229)、その後、管財人会によって管理される国立館 (The Royal Armouries) となっている。現在、コレクションの多くはリーズ (Leeds) 郊外に開館した同名の博物館に展示されている。

#### 5-8「水晶宮」(植物園、水族館を併設)

Sydenham, ロンドン南郊 ②108-111

9月19日 (旧暦8月17日) 木曜日晴れ

この日、副使の久保利通は田中光顕理事官随行の大蔵省職員、長岡義之とともにテムズ・ストリート (Thames Street) の税関 (The Custom House) を訪ねているが、『実記』には記載がない (The Times, 1872. 9. 20.)。

いっぽう岩倉大使たちは、午後の3時から、パークス公使、アレキサンダー将軍の案内により蒸気機関車に乗ってロンドンの南郊「サイデンハム」 (Sydenham) に行き、水晶宮を見学した。現地新聞に記事を欠いているところから、これも私的な観覧であったことが推察される。

水晶宮 (Crystal Palace) は1851年にロンドンのハイド・パークで第1回万国博覧会が開かれたときに主会場として使われた総ガラス張りの建物で、会期終了後に移築されて、総合レジャー施設となっていたが、1936年に焼失した。焼失前に刊行された博物館協会 (The Museums Association) の博物館銘鑑 (MA 1931) に記載がないことから、厳密には博物館施設でなかったことが分かる。

『実記』は、世界的に有名なこの施設の様子を委細に紹介している。建物の長さ482.4メートル、幅は不定。上階の最も高いところが33メートル、左右の端に高さ72メートルの塔が設けられていた。前面には広々とした庭園を設け、建物自体は丘の上に

あったため、近郊の六郡を見渡すことができたという。

建物の1階は直線で300メートルの廊下になっていて、池や泉があり、噴水もあった。そこは熱帯植物園となっていて、池の中には藻、アサザ、ヒシ、ミズブキ、フヨウを育て、かたわらにはバショウ、ヤシ、シュロなどの植栽があった。池の中で育てていたフヨウというのは、スイレンだったのかもしれない。樹々の根元は遊歩道となっており、銅色をした人や黒人、黄人といった世界各地の人々の像に民族衣装を着せたものがその家屋ともども飾ってあって、世界を1か所にまとめた趣向。その間には、白大理石の彫刻も立っていた。その周囲は、カフェやバーやステージになっていて、椅子を何千も並べたホールまで設けられていた。2階は主に絵の販売コーナーになっていて、油絵をはじめ各種が取り揃えられていた。エジプトの古図を模写したものもあったという。ここに付属していた水族館は、海辺のブライトンの海水循環方式とちがって水槽に空気を送り込む仕組みになっていた。こちらの方式の方が優れているという説明を受けたことが『実記』から分かる。庭も見事な庭園となっていた。白い小砂利を敷きつめたさわやかな風情で、花壇も作られており、池には高さ84メートルという欧州最大の大噴水があった。また、大きな恐竜の模型がいくつも、庭園のあちこちに飾ってあった。木馬やブランコを用意してあるお子様コーナーもあった。

この晩は週に1、2回催されていた花火の日にあたって、日暮れ時から打ち上げが始まった。これは近在の火薬会社が製造していたもので、各種の金属の炎色を利用してさまざまな色彩を作り出すということが日本使節には興味深かったらしい。『実記』の書きぶりや当時の日本の新聞資料から判断すると、西洋の打ち上げ花火の方が日本のものよりも優れていたようである。久米の文章は動物園レポートと同様の美文調になっている。ここでは時々イベントが開かれていて、この年の11月19日にはこの国で最大規模という家禽およびハトのショーが開幕している(The Times 1872. 11. 20.)。なお入場料は、南ケンジントンの国際博覧会場やロンドン動物園と同じ大人1シリングであった。

## 5-9「ブリッチ、ミジエム」(大英博物館)

Great Russell Street, ロンドン ②112-114

9月27日(旧暦8月25日)金曜、雨

最初のロンドン滞在の締めくくりとなったのが、大英博物館(The British Museum)の見学である。だが、これも新聞には報道されておらず、ここでも、この見学の私的な性格が伺われる。

『実記』には、まずその収蔵品の多さに始まって、これが市民の自発的な学習に貢献している様子、立地のよさ、開館時間について述べている。彼らは、今日の順路とは逆に大英図書館の方から見てまわったようで、大ドームの様子に感激し、ついで、東洋図書館のコーナーの漢書、和書についても言及している。それから博物館部分の自然史コーナー、ヨーロッパ考古学、エジプト考古学、そして最後にギリシャ・ローマ考古学のコーナーという順に見学したようである。

久米はこの見学に触発されて「進歩トハ、旧ヲ舎テ、新シキヲ図ルノ謂ニ非ルナリ」という見解を『実記』に表明して、家作りの例なども紹介しながら「旧ヲ棄テ新ヲ争ヒ」という日本人の性向について、国民に十分な実物教育の機会を与えないままに民族性の違いであるとして容認してしまうことを「篤論ニ非ルナリ」と戒めている。明治初期の博物館教育論として注目される。

大英博物館はイギリスを代表する博物館で、1700年以来国有財産となっていたロバート・コットン卿(Sir Robert Cotton 1571-1631)の古文書コレクション、2万ポンドで国家に遺贈されたハンス・スローン卿(Sir Hans Sloane, 1753年没)の蔵書および博物コレクション、1万ポンドで買い上げられる事が決定されていたハーレイアンの古文書コレクション(Harleian MSS.)を管理するため、1753年の議会法で管財人会(Trustees)が設立されて発足した。10万ポンドの基金は宝くじで集められ、モンタギュー・ハウス(Montague House, Bloomsbury)が購入されて1759年に開館している。この時の法(The Act of Incorporation)で、無料公開と原則的に不可譲および門外不出(inalienable and irremovable)たるべきことが定められている。1761年のジョージ3世(George III)による献本制度、1801年にフランスから鹵獲され、1804年

から8年にかけて招来された古代エジプトの文化財、1816年のエルギン・マール、1823年のジョージ3世の蔵書とコレクションが増えるにつれて、1823年からロバート・スマーク (Robert Smirke) の設計による現在の建物の工事が始まり、それが1852年に完成すると、旧モンタギュー・ハウスは取り壊された。自然史部門は、1880年から1885年にかけて上記したサウス・ケンジントンの自然史博物館に移転した。(MA 1931, 189-190)

岩倉使節団の大英博物館見学についての先行研究に、武田1993がある。これも中野1993と同様、同時代の中国人の残した観察記との比較検討を通じて、考察を加えている。彼は『実記』の記述が臨場感や具体性を欠き「カタログ的な説明に終わっていること」を指摘している。中国使節の記録には必ずダグラス (Robert Douglas 1838-1913のちにSir) が彼らのガイドとして登場していることから、日本使節にも彼がガイドをしていた「可能性は高い」として、『実記』がそのことにまったくふれていないのは不思議なことであるとしている (武田1993, 104)。しかし、全体を通読すれば明らかのように『実記』に現地のガイドの名前が登場することはむしろ少ない。なお、大英図書館は1998年に大英博物館から転出している。

#### 5-10「博物館」

William Brown Street, リバプール ②135

10月2日 (旧暦8月30日) 水曜日、

朝美晴昼過雨一行ス

前日曜日の夜にロンドンからリバプール (Liverpool) についた使節団は、その翌日から港湾施設などの重要な産業拠点を精力的に視察した。無料図書館&博物館 (Free Library and Museum) を見学したのは、水曜日の午前中のことで、船で川向こうのドックランドを見学に行く前のことである。

現地の新聞は、リバプール入りした使節団の訪問を詳細に報じているが、Free Library見学の記事は簡単である。「使節団ははじめに無料図書館を見学したが、昼前で早すぎたために、職工たちがいつものように読書室を埋め尽くしているところを見ることができなかった」(The Daily Courier 1872.

10. 3.)。

この博物館は1851年に開設され、準男爵ウィリアム・ブラウン卿 (Sir William Brown, Bart.) の寄贈した建物で1860年から一般公開されていた。1902年に増築されており、使節団が訪ねた当時は、建物の床面積は現在の3分の1弱ほどだった (MA 1931, 183)。

ここは総合博物館で、一行は「海石ノ室」から鳥類コレクション、海獣魚介コレクション、動物の骨格標本、考古学コレクション、図書館、画廊、大理石像のコレクションを歴覧したことが『実記』からわかる。小学生の見学団に行き合わせた記述もある。

#### 5-11産業(「インジストリア」)博物館

Chambers Street, エジンバラ ②209-211

10月14日 (旧暦9月12日) 月曜日 晴れ

リバプールの後、マンチェスター (Manchester)、グラスゴー (Glasgow) と歴訪し、前の週の土曜日にスコットランドの首都エジンバラ (Edinburgh) 入りした使節団はこの月曜日、アーチャー教授 (Prof. Archer) に伴われて図書館 (The Signet Library 次に The Advocates' Library)、旧スコットランド議場(裁判所, The Parliament House and Courts) を見学してから、博物館を見学したのち、大学見学に向かった。(The London and China Express 1872. 10. 18.)。

この博物館は、1854年に用地と建物および当初のコレクションを購入するための基金を議会が可決して発足した国立館である。当初は既存の建物での仮設展示から始まり、現在の館は1861年にアルバート公 (The Prince Consort) によって礎石が据えられたもの。途中、1865年にエジンバラ大学の自然史コレクションが東翼に搬入され、新しい館での一般公開は1866年から始まっていた。『実記』には「インジストリア」博物館とあるが、すでに1864年に館名はスコットランド産業博物館 (The Industrial Museum of Scotland) からエジンバラ科学技術博物館 (The Edinburgh Museum of Science and Art) へと変更されていた。なぜ久米が『実記』で旧称を使用したのか、興味が持たれる。この博物館ではその後1875年に第2期工事が完工し、1888年には西翼が完成した。1904年には王立スコッティッ

シュ博物館 (The Royal Scottish Museum) と改称されて、その後もさらに増築され (MA 1931、111-112) 「ヨーロッパでもっとも総合的な博物館のひとつ」 (Hudson & Nicholls 1991、56) となっている。現在は、王立スコットランド博物館 (The Royal Museum of Scotland) という名称になっている。

なお、Queens Street の国立肖像画館 (National Portrait Gallery) と同じ番地にこれと同名の館があるが、そちらはスコットランド骨董協会 (Society of Antiques of Scotland) が1851年に寄贈したコレクションをもとに1891年に開館した国立骨董博物館 (National Museum of Antiques) が1985年になって名称を変更した、別の館である。

なお、当時すでに王立スコットランド美術院 (Royal Scottish Academy) とスコットランド・ナショナル・ギャラリー (National Gallery of Scotland) の絵画を集めたナショナル・ギャラリーも開館していたが、使節団がそちらを見学したという記事のないところを見ると、日本使節たちの関心の向かい方が推察される。

#### 5-12 「チャッツヴィース、ハウス」

Bakewell, Derbyshire ②310-315

10月30日(旧暦9月28日)水曜日 くもり

おりから工業都市シェフィールドに滞在して各種の工場を視察していた一行は、この日、工場視察を休んで、デボン公爵カヴェンディッシュ家 (The Duke of Devonshire, Cavendish) のカントリーハウスであるチャッツワース・ハウス (Chatsworth House) をたずねた。当主に館内を案内され。昼食のもてなしを受けたあと、午後は庭園を見学したようである。『実記』に詳細な記事があり、館内のコレクションも見学したことが分かるが、博物館という用語は使用されていない。現地の全国紙は訪問の事実を述べているだけだが、これが科学研究のパトロンとして著名だったデボン公爵の招待によるものだったということが示されている (The Times, 2 November 1872)。

このイギリスを代表するカントリーハウスは、現在、冬季をのぞいて一般公開されているが、登録博物館ではない。

#### 5-13 ウォーリック城および「博物館」

Warwick, ウォーリック州 ②334

11月2日(旧暦10月2日)

朝9時半の列車でバーミンガムを発った一行は、午前中、ウォーリック州の州都コベントリで、市長の案内によりいくつかの工場を見学し、タウンホールで昼食会の接待を受けた後に、再び列車に乗って、ウォーリック城 (The Warwick Castle) を見学している。ここは現在では博物館となっているが、一般公開が始まったのは1880年からである (MA 1931、355)。城の主、ウォーリック伯爵 (The Earl of Warwick) の客人として迎えられたものだろうか。

その夕刻はウォーリック市長だったティビッツ博士 (Dr. John Tibbits) の自宅で会食に招かれた。『実記』には「家ノ最上層ニ、動物、礫石、古器ヲ集メテ室ニ満テリ、食後此家ノ子女、頻リニ博物館ヲ一見センコトヲ勸ム、其ノ好意ニヨリ、上リテ一見ヲナセリ」とあり、この私的なコレクションを指すのに博物館という語が使われている。なお、ウォーリック市内にはすでに民間団体の博物館が公開されていたが、それへの言及はない。

久米は『実記』中で「西洋ノ学術家」で財力と学識のあるものが「各諸物古器ヲ集メ、愛護講明スルコト、毎ニ如此シ」として、自宅のコレクションの「博覧ヲ観娛ノ際ニ誘ス」習慣が児童にさえも及んでいるというのは「文明ノ化ト謂ヘシ」と述べている。すでに大英博物館の項で久米は「進歩トハ、旧ヲ舎テ、新シキヲ図ルノ謂ニ非ルナリ」と自説を開陳していたが、彼にとっての文明開化がいかなるものであったのかがここで繰り返されている。彼がこう述べる時、明治初期の日本における伝統文化財の急速な隠滅が念頭にあったことは繰り返すまでもない。『実記』第4巻のウィーンの武器工場見学記に続く記述に「憶フニ博覧会場ニ各国ノ戎器ヲ列品シタレハ、老練ノ兵学家モ、更ニ経験スル所アリテ、進歩ノ思考ヲナスアルヘシ」(『実記』④397) とあるのも、同趣旨の発想である。

なお、その後11月5日には、ロンドンのギルドホール図書館と博物館が開館している。使節たちはおりからバーミンガムに滞在中であった。2000人近い開館式の招待客の中に、日本人の参加があったかどうかは、この模様を報じた新聞の報道からは明らかで

ない。

#### 5-14勸農寮（農業展覧会）

Market Place, レディング ②373

11月25日（旧暦10月25日）月曜

朝曇り、昼から雨

使節一行はこの日、ロンドン西方に60キロ程行った所にあるバークシャー（Berkshire）の州都、レディング（Reading）の市長から招待を受け、日帰りの視察旅行に出かけている。

この日の構成は大使の岩倉具視、大久保利通、山口尚芳の両副使と随員3名。これに、ハリ卿、アレキサンダー將軍、通訳のアストンという接待係のイギリス勢3人組が加わって、つごう9名の一行は、ロンドン・パディントン（Paddington）駅から10時の汽車に乗って、「ビスコイト」と種会社で知られた「ウレッチング」に、11時過ぎに到着した。『実記』には「特段仕立ての汽車」となっているが、報道によれば、これは彼らのために特別にチャーターした列車ではなく、通常の列車に彼ら専用の客車をつないだものだった。（The Berkshire Chronicle 及び Reading Mercury 1872. 11. 23.）

駅のプラットフォームで、「盛服シ、従者ニ儀仗ヲ具シ」た H.B. ブランディ（Blandy）市長や書記官その他、市の顔役の出迎えを受け、スピーチが取り交わされた。なお、この市長は有名な貝類のコレクターで、この5年後にその貝類コレクションと古美術品コレクションを町に寄贈したことから、ビスケット会社ハントリー&パーマー（Huntley & Palmer）の社主が建物を寄贈して、1883年に公共博物館（現存）が開館している（MA 1931, 297）。

一行は、まず、2時間ほど時間をかけてハントリー&パーマーのビスケット工場を丹念に見学した後、種物会社サットン（Sutton and Son's）の新社屋を見学した。これが『実記』にいう「農業博覧場」である。この会社は王室御用達のロイヤル・シード・エスタブリッシュメント（The Royal Seed Establishment）として、農業県バークシャーというよりむしろ英国農業の重要拠点で、社屋も長さ120メートル、幅12メートルという広大な建物だった。『実記』には「本日ハ其農業博覧場ヲ開キシ際ニテ」とあるが、ロイヤル・バークシャー・ルートショー

（Royal Berks Root Show 根菜品評会）の日程は前の週の金、土曜だった（The Berkshire Chronicle 及び Reading Mercury 1872. 11. 23.）。日本使節の観覧のために、展示を残しておいたと思われる。

ここには、サットン社の改良品種を購入したイギリス各地の篤農家や貴族が、手塩にかけて育てた自慢の大物根菜を出展していた。「勸農ノ法モ、亦貴族豪家ノ注意ニ出ツ」と『実記』にあるように、このショーの出展者の中には、ビクトリア女王、プリンス・オブ・ウェールズ（Prince of Wales）、ルイズ王女（Princess Louise）、ウェリントン公爵（Duke of Wellington）、エイルズベリー侯爵（Marquis of Aylesbury）、ブリストル侯爵（Marquis of Bristol）といった名前が見える。サットン社は総額80ポンド以上の賞金を用意した。

この年は天候不順、つまり、播種の季節に雨が続き、その後の生長期も冷夏だったために、不作が心配されていたそうだが、会場に集まった大物野菜は例年にひけを取らぬ見事な出来栄えだった。使節団は、日照の少ないイギリスでかくも巨大な野菜が育つのかと驚いたようである。

「日本にもカブはあると言われているが、大使たちは、社主のマーティン・サットン（Martin Sutton）氏がモンスター級のカブを示して『その親類がこれですよ』と説明しても、『とても信じられない』という様子であった」。1等の銀杯を受賞した「サットン交配チャンピオン」スウィード・カブ（Sutton's Champion Swede）は、24個で174キロあったという（Bell's Weekly Messenger 1872. 11. 25.）。

『ウィンザガッソル』ニ於テ、皇帝、皇太子、及ヒ皇太子ノ妃、耕種シタル馬鈴薯モアリヌ」と『実記』にあるように、日本使節は、ウィンザー（Windsor）、オズボーン（Osborne）といったビクトリア女王（Queen Victoria）の農場やプリンス・オブ・ウェールズ（Prince of Wales）の農場でとれた野菜が展示されていることに、関心をそそられた。すでにウィンザーの王室の農場を9月7日に見学していたためでもあったと思われる。

ジャガイモにたくさん品種があるというのも珍しく、日本使節は興味深げに見学した。

一行が「何度も何度も後ろを振り返って」見ていたのが、巨大な根菜類を塔のように盛り上げた展示

だった。スィード・カブについては上記したが、ドラムヘッド・キャベツひとつで27キロというものもあったし、エイルズベリー侯爵が出展した「マンモス長赤砂糖大根」(Sutton's Mammoth Long Red Mangold)は、12個で222キロ、最大のものはひとつで26.7キロあった。大いに感動した岩倉大使は「こういった根菜類、とくにわが邦の白カブと違う『チャンピオン』カブラを日本に導入して、我が国の農業を富ませたい」という感想を述べた(Bell's Weekly Messenger 1872. 11. 25.)。使節一行は、これらの入賞作物とは、12月11日に、後記するロンドンのアグリカルチャー・ホール(The Agriculture Hall, Islington)で再会することになる。

なお、『実記』に「陳列ノ内ニ於テ、尤モ奇特ナルモノアレハ、硫酸石灰ヲ以テ其形ヲ模造シ、楼上ニ蓄フ」と述べている入賞野菜の石膏模型は、翌年にウィーン(Wien)で開催される万国博覧会に出品するためのものだった。その万博で賞品として授与される、イギリスの野菜、穀物、種物を描いたトロフィーの模型も彼らに披露された。それから使節団は倉庫、会計棟、講義室、読書室といった社内の施設を隅々まで見学している(Bell's Weekly Messenger 1872. 11. 25.)。

しばらくホテルで休憩したあと、2時過ぎにサットン社から程近い市庁舎(The Town Hall)で市長主催の昼食会がはじまり、日本使節はそこで、言葉がまるで分からないながら健啖家ぶりを発揮したと報じられている。この午餐会には地元から列席した「八十余人」が臨席したが、その筆頭格が、令嬢同伴で上席についていた地元選出の国会議員、ショーールフェーブルであった。彼が、経済学者J. S. ミルなどの参加を得て1865年に設立した「入会地保存協会」は世界最初の環境保護団体と言われており、この団体からは後に有名なナショナル・トラストも生まれている(Watson 1994のchapter 1)。ミルは言うまでもなく、著書『自由論』を通じて、その後、自由民権運動に多大な影響を与えた人物である。こうした記載は『実記』に一切なく、長島(1993, 179)の指摘する「岩倉使節団に見ることのできなかつたもの」のひとつと言えるだろう。

## 5-15 印度博物館

Leadenhall Street, ロンドン ②374

11月29日(旧暦10月29日) 金曜、くもり・雨

この日、使節団は、アレキサンダー將軍の勧めにより、インド博物館を見学している。この縦覧については新聞に記事がなく、これも私的な見学だったと推測される。この博物館は1873年に東インド会社 East India Company が廃止されるまで、Leadenhall Street の East India House におかれていた。使節団の見学したのもここであろう。この時、日本使節は東洋関係の展示を見学したものでしょうか。

その後、コレクションはホワイトホール(Whitehall)のインド省(India Office)の屋根裏に死蔵されていたが、1851年万博の理事会(Commissioners)にリースされ、サウス・ケンジントン博物館の一部門として Exhibition Road の仮設展示会場に陳列されたのち、1880年からは現在の V&A 博物館のコレクションに加えられて、東南アジア諸国の文物とあわせて Imperial Institute Road の分館インド館(Indian Section)で展示された(Wheatley 1891 vol. II 257, および MA 1931, 231)。

## 5-16 海軍病院

Romney Road, グリニッチ ②377

12月2日(旧暦11月2日) 月曜、晴

使節団はテムズ川を船で下って、ウーリッチの対岸にあるベクトン(Becton)の石炭ガス製造会社の見学に出かけたが、おりからストライキのために果たせなかった(The Times 1872, 12, 4.)。『実記』の記事はストライキには言及していないが、一行はガス会社の裏手の下水処理施設を見学したあとで、川をさかのぼり、グリニッチの「海軍病院」と「軍艦器械製造場」を見学したのち、薄暮に汽車でロンドンに帰ったことが示されている。当時、グリニッチには、海軍関係の施設が集中していた。だが、こうした見学については、新聞に記事を欠いている。

現在のグリニッチには、ロムニー・ロードをはさんで、テムズ川に面する道路の北側に王立海軍大学(Royal Naval College 現存)が、道路の南側にはかつての王宮クイーンズ・ハウス(The Queen's House)の建物を中核にした国立海事博物館(The National Maritime Museum)がある。『実記』

に「緑威ノ海軍病院ハ、元王宮ニテ」とあるが、両者は別のものであった。この時、使節団は両者とも見学したのであろう。クイーンズ・ハウスは、建築家イニゴ・ジョーンズ (Inigo Jones) によって英国初のイタリア・パラディオ様式の建物としてつくられたもので、1637年の完成。その後、1694年にクリストファ・レン卿 (Sir Christopher Wren) が委嘱されて、テムズ川に面して海軍病院のための建物が建築されている。

この海軍病院は岩倉使節団が見学した翌、1873年に議会の決定により閉鎖され、その跡には王立海軍大学が入居して、現在に至っている。これにともない、1710年頃から1860年代にかけて収集されていた海軍病院コレクションと、この時サウス・ケンジントンからグリニッチに移ってきた海軍造船学校 (The School of Naval Architecture and Marine Engineering) が保有していたコレクション (かつてサマセット・ハウス (Somerset House) にあった海軍省 (Navy Office) が海軍提督局 (Admiralty) と合併した際に、海軍省付属博物館から譲り受けていたもの) とをあわせて、海軍大学と同じレンの設計した建物内に別組織として王立海軍博物館 (Royal Naval Museum) が発足している。しかし、やがてコレクションの増加につれてそこでは手狭になり、1931-2年にかけて王立看護学校 (Royal Hospital School) がクイーンズ・ハウスから転出したあとに移動し、1937年からは、1934年設立の国立海事博物館に吸収・合併されて、それ以来、これらのコレクションとクイーンズ・ハウスは海事博物館の中核となっている。(MA 1931、202、Hudson & Nicholls 1991、82、Britannica 5-474 b)。使節団一行は、海軍病院で「英ノ海軍戦捷図」や「支那広東ノ戦ニテ奪ヒタル旗、其他処処ノ分捕物」それにネルソン提督の遺品等を見学したことが『実記』からわかるが、『実記』に「海軍総督『ネルソン』氏が、『タラフルカル』ノ戦ニ、仏、西、両国ノ海軍ヲ破リ砲丸ニ打貫カレ、討死ニセシハ、英国海軍ノ美談ニテ、其時ニ著セル戎服ト胸衣トアリ、玻璃ノ箱ニ蓄フ、血痕淋漓トシテ猶存ス」と描写されている、ネルソン提督が戦死した時に着用していた敵弾に打ち抜かれた軍服等は、現在も国立海事博物館に展示されている。

なお、岩倉使節団たちが見学に訪れた翌週、12月7日に、木戸孝允、大久保利通、山口尚芳の3副使と書記官3名が、アレキサンダー将軍の案内で再びグリニッチを訪れ、丘の上の旧王立天文台 (The Old Royal Observatory) を見学したことが木戸孝允の日記から分かるが、『実記』や新聞にはその記事を欠いている。この、1675年以降の歴史をもつ旧天文台も、現在は国立海事博物館の分館となっている (MGC 1988、51)。

## 5-17 農業寮

Liverpool Road / Islington Green, Islington, ロンドン ②378-380

12月11日 (旧暦11月11日) 水曜、晴れ

『実記』に『『シチー』内ナル『アグリクリヂュハホール』ニ至ル』とあるため、類書ではシティの農業ホールとされてきたが、これはイズリントンの農業ホール (The Agriculture Hall) と思われる。シティにはそのような施設はつくられていなかった。後年、ここはロイヤル農業ホール (The Royal Agriculture Hall) と改称されて、地下鉄ノーザン線のエンジェル駅 (Angel, Northern Line) を出た右手に現存し、近年の修復の後、見本市会場として現在も利用されている。

これは、もともとスミスフィールドクラブ (Smithfield Club) のクリスマス家畜品評会 (The Christmas Cattle Show) 用として総工費4万ポンドで建設された、建物の総面積が1.2ヘクタールもある大規模なもの。屋根は鉄とガラスのアーチとなっていて、大ホールだけで長さ115メートル、幅65メートルある。建築家フレッド・ペック (Fred Peck) により、1861年から翌年にかけて建設されたもので、他にも各種のイベント会場として使用されていた (H. B. Wheatley 1891 vol. I、10)。

この年のショーは12月9日の月曜から13日の金曜日までの週で、使節一行がやってきた11日は水曜日である。現地資料に日本使節の記事は見えない。この年のクラブの会長はトレディガー卿 (Sir Treddiger)、副会長はエクセター侯爵 (Marquis of Exeter) だった。

この年は、会期終了後にプロムナード・コンサートが予定されていることもあって、館内にはじめて

3 インチの厚さの床が特設され、土間から土ぼこりの立たない快適な品評会場だったようである。

この年のショーに、ビクトリア女王はウインザーのフレミッシュ・アンド・ショー・ファーム (Flemish and Show Farm) で改良したデボン種 (Devon) および短角種 (Short Horn) の牛、プリンス・オブ・ウェールズはサンドリングガム (Sandringham) から羊や牛を出展した。出展者のなかにはリッチモンド公爵 (Duke of Richmond)、スペンサー伯爵 (Earl of Spencer)、モールバラ公爵 (Duke of Marlborough)、ハードウィック伯爵 (Earl of Hardwicke)、エクセター侯爵 (Marquis of Exeter)、サザランド公爵 (Duke of Sutherland)、レスター伯爵 (Earl of Leicester) らの名前も見える。おりから口蹄疫病が流行していたため、優良品種が一堂に会するこうした機会に患畜がまぎれこまないよう、健康診断には細心の注意が払われていた (Bell's Weekly Messenger 1872. 12. 9.)。なお、宮永 (1997, 51-52) によれば、日本使節は9月16日にメトロポリタン畜肉市場を見学しているという。

## 6、おわりに

以上見てきたように、岩倉使節団は、基準の取り方による異動はあるにしても、イギリスに滞在した4ヵ月間だけで、多様な博物館とそれに準ずる施設をたびたび訪ねてコレクションされた品々を実見している。もちろん博物館見学はイギリスに限られたことではなく、米欧でのこうした経験は、田中不二麿理事官のような実務担当官ばかりでなく、使節団に大使、副使として参加していた時の政府の枢要の立場にある人々にとっても、モノを収集、展示して市民に見せる施設への一定の認識と共通理解を形成するには十分なものであったと結論づけることが出来るだろう。政策決定過程の実証研究など、今後、解明すべき点は多々あるが、明治5年という早い段階で、新政府の最高決定権者のあいだでこうした経験が共有されていたということは、注目に値しよう。従来の博物館史研究は特定個人の業績およびその理念的、思想的な博物館理解に重点を置くことが多かったが、これは、近代的官僚国家としての政府部門におけるチームワークに対する研究の視座が必要なことを示唆するものかもしれない<sup>(注12)</sup>。

そのいっぽうで、博物館が使節団の第一等の関心事ではなかったということは、イギリスにおける文物視察のヤマ場となった北部産業都市歴訪の視察日程のなかに博物館見学がほとんどないことから明らかである。だが、この使節団の見学先の設定そのものからして、西洋の文物に学んで文明開化 (Westernisation) に資すべしという日本側の意向よりも、むしろ受け入れ先の思惑に大きく左右されていたと見る方が適切であろう。この点について、近年の文物視察に関する研究中で指摘しているものを管見のかぎり見ないが、国賓であった彼らの見学先は、パークス駐日公使やアレキサンダー少将ら、イギリス政府から接待を委嘱された担当官や、使節団を招待した地方自治体によってお膳立てされたものが大半である。『実記』に記載がない個別の理事官の調査を別にすれば、上記したブライトンの水族館やサウスケンジントン博物館 (国際博覧会)、それにウーリッチのロタング火器博物館などで、日本使節団が特に希望して複数回の見学を行っているのは、全体の日程の中ではむしろ例外的なケースだったといえる。

使節団を国賓として迎えたイギリス政府にしてみれば、日本の明治政府は、幕府を支援したフランスに対抗して武力討幕を支援し、ついに新政権を成立させた友好国であり、これに最先端の武威を見せつけながらその関係を継続・強化することは、望ましく、また必要なことであった。民間の会社にとっての日本は、多年にわたる鎖国がとけ、新規開拓が期待されるアジア市場の重要な中核であるばかりか、毎年100万ポンドの国債を発行して年利8ないし9パーセントで資金を借りて、しかもその資金で鉄道、灯台や各種の産業プラントといった大口の注文をよこしてくれる (The London and China Express 1872. 9. 27.) またとない顧客であった。使節団は各地で、工場見学の傍らプラントの見積もりを取ったり発注をおこなったりしており、民間会社としては商談を有利に導くために自社を売り込む必要があった。

もちろん、それが企業秘密を公開してまで日本の文明開化を応援しようというような性格のものではそもそもなかったということは明らかである。例えば『実記』には、10月15日に訪問したゴム会社の記

述 (②216) で「子細ノコトハ秘シテ告ス」とあるし、編者の久米がイギリス視察を振り返って「英国ニ観察シテ、感触ヲ我ニ与フル所、亦甚タ親切ナラス」と『実記』の第二巻を結んでいたりと、また、久米が後年「漫識特の当场でも、工場を観覧させるのに順序一貫せず、先後を顛倒した様な気合が感ぜられたが、恐らく、是と同様忌避されて居たかと思はれる」(『久米博士回顧録』下巻、333頁 田中1978、398から引用)と述べていることなどはその証左である。国賓として使節団を迎える側のこういった思惑や使節団の明治初年における経済史上の役割という全体の文脈を離れて、研究が個別の文物視察に特化することには、つねにある種の危険がつきまわっていると云わざるをえない。

このように、狭い意味での博物館は、主要なイギリス側の思惑とも、日本側の思惑とも関係しなかったわけだが、物産の見本市会場は違っていた。南ケンジントンの国際博覧会、レディングの種物会社の農業展覧会、イズリントンの勸農寮等や、今回言及しなかったがウィーン万博など、使節団が各地で視察した民間企業の産業施設ともある程度オーバーラップするものがあるこれら見本市会場を親しく見学したことは、その後の日本の「商品陳列所」ブームの訪れを予告するものと考えられる。

最後に、気づいた点について若干付言しておきたい。まず、今回使用した新聞史料は扱いやすいものではあるが、史料的な制約はつねにつきまとう。例えば全国紙の The Times の場合、渡英当初は記事が多く、その後少なくなっていることから分かるように、これはイギリス側の関心を反映したものである。内容の精度についても、可能であれば、複数の記事を突き合わせる事が望ましいことはいうまでもない。岩倉使節団のイギリス滞在に関しては全国紙の報道に始まって地方紙への調べが進みつつある段階といえるが、今回レディングの農業博覧会の項で使用した農業新聞 Bell's Weekly Messenger の記事が詳細を極めていたことから、今後はこうした専門紙、業界紙に新史料探求の余地がありそうである。従来は、岩倉使節団と『実記』の研究が区別されないことが多かったが、今後、久米邦武に関する研究が進展するにつれ、また現地史料がさらに発掘されてゆくにつれて、両者を峻別する必

要性も高まってくると思われる。

## 謝 辞

本稿の作成にあたって、鷹野光行教授(お茶の水女子大学) Mr. John Creasey (Rural History Centre, University of Reading) の両先生には文献史料の紹介と有益な示唆を頂戴いたしました。また古市直子氏(図書館司書)には文献探索の労をとっていただきました。ここに記して、感謝申し上げます。

## 注

注1、1845-1909、理事官として使節団に参加した時には文部大丞。帰国後の明治6年から8年にかけて『理事功程』がある。1879(明治12)年にはいわゆる自由教育令を策定、公布するなど、後に司法畑に転ずるまで、文部行政の中心人物として、学校制度の整備を担当した。田中の教育制度づくりへの貢献については開国百年記念文化事業会編1956、328-336に詳しい。また、田中の部下であった手島精一に関する最近の研究として佐藤1998がある。

注2、1840年生、旧薩摩藩士。1865(慶応元)年に薩摩藩の幹部級留学生として渡英。翌年、森有礼らとアメリカに渡り、1867年からニュージャージー(New Jersey)州のラジャース・カレッジ(現、Rutgers University)に在籍。1871(明治4)年4月太政官の命により岩倉使節団に加わる。アメリカ滞在中の1872(明治5)年1月に三等書記官。使節団では通訳も兼ねて久米邦武とともに紀行編集を担当。1873(明治6)年に帰国後、初代の開成学校長兼外国語学校長。1875(明治)年には東京書籍館・博物館の館長。1876(明治9)年にフィラデルフィア万博が開かれたとき、文部省から派遣された、教育制度視察調査団(団長、文部大輔田中不二麿)に、中督学として参加。旅先で病を得、帰国の船中で客死。

注3、例えば、文部省博物館が太政官所轄の博覧会事務局に併合されたのち文部省に返還されて世界で11番目の教育博物館となるまでの経緯については椎名1988、41-44を参照。

注4、採用されなかった例として、例えば佐野常民の構想がある。その経緯については樋口、椎名1981、59を参照。

注5、大久保は1876年のフィラデルフィア万博では、みずから日本政府の参加窓口である「米國博覧会事務局」の総裁をつとめており、こうした施設への彼らの関心の高さがうかがわれる。

注6、岩倉1825-1883、木戸1833-1877、大久保1830-1878、山口、伊藤1841-1909らは明治政府の中で「開明派」と通称されている。彼らは、帰国後、いわゆる明治6年の政変で西郷隆盛、板垣退助、江藤新平ら「征韓論派」を押さえ、政府部内における権力を掌握した。この外遊自体も、大隈重信の温めていたアイデアだったものを、権力抗争のステップとして彼らが利用した形跡がなしとはしない。

注7、1839-1931、佐賀藩士、漢学者。東京帝大の歴史学教授となるが、筆禍事件（論文「神道は祭天の古俗」が右翼の目にとまり、攻撃にさらされる）により辞任。後に早稲田大学教授。

注8、同時代史料として、The Crystal Palace and Its Contents, an illustrate cyclopaedia of the great exhibition of 1851, pp.. 424 No. 1 Oct. 4, 1851~ No.25. March 20, 1852. Bradbury and Evans, Printers, Whitefriars, Londonがある。

注9、『実記』には水族館を見たあとで市長邸で昼食とあるが、時間的にいささか無理があるように思われる。8月22日付のブライトン・ガゼット紙(The Brighton Gazette)の簡単な記事にはレセプション・ルームを訪ねて、それから2時からの昼食後に、学会を聞いたとなっている。こちらは昼食の記事については詳しいため、記者が同席していたと考えられるが、その他の記事については又聞きであった可能性があり、信憑性はブライトン・ガーディアン紙より劣ると判断される。

注10、The London and China Express 1872. 8. 23. には21日に2度目の訪問を果たしたとあるが、The Brighton Gazette 1872. 8. 29. には「やんごとなき東洋の賓客」の水族館再訪は木曜日とある。後者、現地紙に従っている。

注11、例えば London Streets, W. H. D. Adams, Henry and Company, London, 1890.

注12、例えば田中不二麿は、プロイセンからもどってイギリスに滞在中の使節団本隊と合流した後、他の理事官たちとともに木戸孝允をたびたび訪ねて歓談していることが宮永1997により紹介されている。('木戸日記'11月25日、26日、27日、30日。12月1日、2日、5日、6日の条)。

## 文 献

青山英幸「留学生と岩倉使節団」田中、高田編著1993所収。

石附 実『教育博物館と明治の子ども』福村出版1986年12月。

岩本1998 岩本陽児「散切り頭が見た英吉利 岩倉使節団のイギリスレポートを読む」イギリスの在留邦人向け新聞「週刊ジャーニー」の連載記事、創刊号(1998年3月5日)~第51号(1999年2月5日)、ジャパンジャーナルズ社、ロンドン。

大塚久雄1967「産業革命の諸類型」土地制度史学第36号、土地制度史学会1967年。

Olding, Simon, Exploring Museums London, HMSO, London 1989, ISBN 0 11 290465 3.

開国百年記念文化事業会編『日米文化交渉史 第三卷 宗教・教育編』(編纂委員 岸本英夫、海後宗臣)財団

法人開国百年記念文化事業会、洋々社1956年5月。

加藤周一「日本人の世界像」『近代日本史講座』8、筑摩書房、1961。加藤周一著作集第7巻pp. 362-432所収、平凡社1979年7月。

倉内史郎、伊藤寿朗、小川剛、森田恒之編『日本博物館沿革要覧』野間教育研究所紀要、別冊1981年9月。

佐藤優香「教育博物館における教育機能の拡張—手島精一と棚橋源太郎による西洋教育情報の受容—」『博物館学雑誌』第23巻第2号pp. 51-64 1998年3月。

椎名仙卓『日本博物館発達史』雄山閣出版1988年7月 ISBN 4-639-00733-7。

椎名仙卓「勸工場第1号は陳列場であるが博物館ではない—博物館事始め(36)—」『博物館研究』第24巻第4号pp. 31-33。

- Stevens, P., Old Hampshire Photographs, Hendon Publishing Co. Ltd., 1986.
- 武田雅哉「大英博物館を見たふたつの東洋」田中彰、高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』所収。
- 田中 彰『岩倉使節団』講談社現代新書。1977年  
なお、本稿では1994年の岩波同時代ライブラリー版に収録された『岩倉使節団『米欧回覧実記』』を使用した。岩波書店、1994年2月 ISBN 4-00-260174-9。
- 田中 彰 田中彰校注『特命全権大使米欧回覧実記二』岩波文庫、1978年 青141-2 ISBN 4-00-331412-3。
- 田中 彰 田中彰「岩倉使節団と『米欧回覧実記』」田中彰、高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』所収。1993年。
- 田中 彰、高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』北海道大学図書刊行会1993年3月 ISBN 4-3829-5571-3。
- Thompson, Colin., Exploring Museums Scotland, HMSO, London 1990, ISBN 011 290474.2.
- 長島要「デンマークにおける岩倉使節団」田中彰、高田誠二編著1993に所収。
- 中野美代子『『米欧回覧実記』における動物園見学記録と動物観』田中彰、高田誠二編著1993に所収。
- 西川長夫、松宮秀治編『『米欧回覧実記』を読む、1870年代の世界と日本』所収、法律文化社1995年3月 ISBN 4-589-01848-9。
- Hudson, Kenneth and Nicholls, Ann, The Cambridge Guide to the Museums of Europe, Cambridge University Press, Cambridge 1991, ISBN 0 521 37175 9.
- 原口虎雄『鹿児島県の歴史—県史シリーズ46—』、山川出版社1973年10月。
- 樋口秀雄、椎名仙卓「日本の博物館史」『博物館学講座2 日本と世界の博物館史』所収、雄山閣、1981年1月 ISBN 4-639-00002-2。
- 福井純子『米欧回覧実記』の成立、西川・松宮編1995、pp. 429-453所収。
- 福沢諭吉『西洋事情』第1巻。永井道雄責任編集『福沢諭吉』、中央公論社1969年9月（中公バックス版は1984年7月）日本の名著33のpp. 356-382に所収。
- 藤井 泰「岩倉使節団のバーミンガム訪問——地元新聞の報道記事の紹介」『松山大学論集』[ISSN: 09163298]  
(松山大学学術研究会) 1 (5・6) 1990年2月 pp. 157-207。
- 松宮秀治「万国博覧会とミュージアム」西川、松宮編1995に所収。
- 宮永 1997『白い崖の国をたずねて、岩倉使節団の旅、木戸孝允のみたイギリス』集英社、1997年3月 ISBN 4-08-781148-4.
- Museums Association, The, Museums of the British Isles, published by the Museums Association, London 1931.
- Museums & Galleries Commission, The, The National Museums, The National Museums and Galleries of the United Kingdom, HMSO, London 1988 ISBN 0 11 290457 2.
- 森川輝紀「英国の新聞報道にみる岩倉使節団」『埼玉大学紀要教育学部』28巻、森川輝紀『近代天皇制と教育』に再録。梓書房1987年4月。
- 吉田文和、遠藤一夫編『『米欧回覧実記』技術関連項目解説分類集成』田中彰、高田誠二編著1993に所収。
- Waterson, Merlin, The National Trust, first hundred years. The National Trust / BBC, London 1994, ISBN 0 563 37066 1.
- Wheatley, H. B. London Past and Present: its history, associations, and traditions. By H. B. Wheatley. Based upon the Handbook of London by the late Peter Cunningham, John Murray, 1891 London.